

## 三井越後屋と為替方

——天明期の贈答をめぐる——

小 沢 詠美子

はじめに

三井越後屋は、周知のとおり江戸時代には両替商と呉服店を経営していた豪商である。貞享四年（一六八七）年には幕府の呉服御用達を、元禄四年（一六九一）には、本白銀町二丁目の越後屋八郎兵衛（三井高利長男・高平）と駿河町の三井次郎右衛門（同四男・高伴）が、大坂から江戸へ送られる幕府の公金を為替手形で処理する業務を請け負う金銀御為替御用達を命じられ、豪商三井家の基礎を築くこととなる。<sup>（1）</sup>

こうした御用達としての活動について、『三井両替店』では、為替御用を引き受けたことにより三

井の両替店経営が発展を遂げることができ、江戸と大坂に分離している幕府財政をむすびつける役割を実質的に果たした、と評価している。<sup>(2)</sup>したがって、三井家ではこの立場を維持するため、幕府および為替方の役人達とのつきあいが、緊密になっていったと考えられる。

さて、本稿で扱う天明期（一七八一～八八）は、いうまでもなく老中田沼意次を中心に、貨幣と商業を重視した経済政策が展開されていた時期である。一〇代将軍家治の下、田沼は勘定奉行松本秀持、同赤井忠晶、勘定組頭土山宗次郎らに従え、自らの経済政策を押し進めていったが、その中で活発な贈答、つまり贈収賄が慣例化し、賄賂政治の横行する暗黒時代であったと、従来は評されてきた。辻善之助はこうした評価を継承しつつも、田沼の積極的な経済政策を評価している。<sup>(3)</sup>一方、大石慎三郎は従来の田沼観を否定、田沼の政策、とりわけ蝦夷地政策を高く評価し、これは田沼再評価の先駆けとなった。<sup>(4)</sup>さらに竹内誠は、長崎貿易振興政策に注目、田沼の経済政策の中に新氣運の潮流がいくつか見られると評価する。<sup>(5)</sup>また藤田覚は、商業資本を利用して利を求める田沼の政策が、社会の隅々まで「好利」「貴金賤穀」の風潮を行き渡らせることとなり、その結果ワイロが横行したと分析する。<sup>(6)</sup>

ところで、これまで三井家における贈答と経営との相関関係に関する研究は、ほとんど皆無であるといつて差し支えなからう。そこで本稿は、為替方に対しどのような贈答が慣例として行われていたかを具体的に検証、三井家の経営と贈答慣例との関わりを明らかにし、同家における贈答の意味を考

表1 天明元年上半期の贈答（三井文庫蔵「為替方御勤方入目録」より作成）

No.	費 目	件数	%	備 考
1	年中行事	10	10.4	年玉・端午祝儀・七夕祝儀
2	時候の挨拶	25	26	暑気見舞い・時候見舞い
3	火事見舞い	10	10.4	類焼・近所出火
4	普請完成祝儀	2	2.1	普請出来
5	病氣・死亡見舞い	7	7.3	病氣・痛風・安産・死亡
6	「家」への見舞い	3	3.1	婚礼・隠居・家督相続
7	着任など祝儀	9	9.4	組頭着任・新任挨拶・退役祝儀ほか
8	留守居見舞い	11	11.5	
9	餞別など	8	8.3	上京餞別・帰着祝儀
10	挨拶	5	5.2	「挨拶之儀有之」ほか
11	ねだりなど	6	6.3	「度々入来入目」「ねだりにつき」ほか
	合 計	96	100	

察するものである。

一、為替方への贈答

表1は、「為替方御勤方入目録」（以下、「目録」と記す）をもとに、江戸両替店における天明元年（一七八一）正月から七月上旬までの役人への贈答関連の事項を集計したものである。<sup>(7)</sup>ここからは、年中行事（No.1）や時候の挨拶（No.2）など季節に関わる慣例的な行事としての贈答が、全体の三六・四％を占めており、現代日本における一般的な贈答習慣との共通性が指摘できる。しかし、災害都市であった江戸ではやはり、火事見舞い（No.3）の件数が多いことは、注目すべきであろう。そして、着任・留守居見舞い・餞別など（No.7～9）の仕事関連の贈答も二九・二％に、挨拶（No.10）・入来入目（No.11）などの接待と見られる贈答も一一・五％にのぼっ

ており、商人と役人のあり方の一端がうかがうことができる。以下では、さらに詳しく分析する。

(1) 年中行事

まず、正月の年玉を見ると、三井家では御金同心衆・御金奉行家来衆らに扇子や絹糸を一包ずつ贈っており、これは合計で銀一〇匁八分にのぼる。五月の「端午」には祝儀として、宮川源次郎という役人に対し肴一折、金額にして銀四匁九分が贈られている。七月の「七夕」祝儀は、三名の御金同心衆元締には金一両ずつ、御金同心衆・御殿湯吞所同心衆・その他役職不明の役人らには金一〇〇〃三〇〇正ずつが贈られ、その総額は金一九両であった。

なお、天明五年の「目録」には、「上巳」御祝儀のため銀三匁八分相当の肴一折が若村市左衛門に贈られていたり、里見幸右衛門という役人へは銀三匁四分相当の肴一折のほか、初節句を迎えた娘のために銀一三匁五分相当の雛人形一箱と、子供達に銀四匁相当の菓子一包みを贈っていることも記されている。<sup>(8)</sup>つまり、五節句の内、上半期に行われる四度の節句については何らかの贈答の行われていたことが確認できるのである。

一方、これらの史料は正月から七月上旬までの記録であるため、年玉・上巳・端午・七夕しか記載されていないが、天明元年七月下旬から一二月までの「目録」には、「良夜ニ付粽鯉一重」が、ここでも宮川源次郎に贈られている旨が記されている。<sup>(9)</sup>さらに、天明四年下半期の「目録」を見ると、九月

一五日付けで若村市右衛門に対し「月見」ご祝儀として、銀一二匁六分相当の肴一折を贈っていたことがわかる。<sup>(10)</sup>そして、五節句の最後のひとつである「重陽」については、天明五年の「目録」に、里見幸右衛門に対して銀三匁四分相当の肴一折が贈られた記録が見られるが、<sup>(11)</sup>全体の傾向としては、重陽よりも月見の贈答の方が記録されている頻度が高い。このことから、当時の慣習の一端がうかがえるよう。

(2) 時候の挨拶

表1に示した天明元年上半期における時候の挨拶としては、「暑中御機嫌伺」「暑氣見舞」「時候見舞」などの表現が見られる。贈られていた品物は、砂糖一曲、鯉（鯉節カ）一本、肴一折、銀二両などで、砂糖はほぼ銀一三匁四分程度、鯉は銀七匁程度、肴は銀三匁から五匁弱、銀二両は八匁六分のものが、四六名の役人らに贈られている。特に、砂糖の贈答件数が多い点に注目すべきであろう。

一方、下半期の動向は、同年の「目録」により「寒中御機嫌伺」「寒氣見舞」「時候見舞」の贈答が確認できる。<sup>(12)</sup>勘定奉行へは銀二〇匁七分の青籠入り肴一折、銀一七匁九分の鴨一番を、その配下の役人らへは銀七匁四分の鶏卵一曲、銀二匁五分の干肴百枚などを贈っており、中でも鶏卵が贈られている場合が非常に多く見られる。こうした傾向は他の年でも確認できるため、暑中見舞いは砂糖が、寒中見舞いは鶏卵が、贈答の際の定番品であったことがわかる。

## (3) 火事見舞い

江戸は火災多発地域であったことはよく知られているが、そのことが贈答慣例にも如実に現れている。安永九年（一七八〇）二月二六日、柳原藤堂和泉守上屋敷から出火、勘定奉行松本秀持の屋敷が類焼した。さらに翌年正月九日には新材木町河岸より出火、葺屋町・堺町・傀儡町などに延焼、小網町で鎮火する火災が発生、一七日には水戸藩中屋敷から出火、長屋二棟が全焼している。晦日にも市谷暗闇坂あたりより出火、柳町方面へ延焼しているし、二月一八日にも千住で火災が発生している。<sup>(13)</sup> こうした火災で被害を受けた役人に対し、火事見舞いとして金品が贈られているのである。

たとえば、御金方の安藤吉五郎という役人へは、天明元年一月一八日に金二分相当の金二百疋と銀六匁相当の酒一樽が、同じく御金方の鶴間彦三郎という役人へは三月一六日に、安藤と同じく金二百疋と酒一樽が、「類焼見舞」として贈られている。また、御金方の役人達への「近所出火<sub>二</sub>付見舞<sub>一</sub>」としては、やはり銀四匁六匁相当の酒一樽が贈られている。<sup>(14)</sup>

なお、同年下半期の動向もほぼ同様である。一〇月一七日には四名の役人に対し、近所から出火し別条はなかった祝儀として、酒一樽ずつを贈っている。被害の有無に関わらず、贈答の行われていたことがわかる。<sup>(15)</sup>

(4) 普請完成祝儀

前年一二月の火災で類焼した、勘定奉行松本秀持邸の建て替え工事が完了し、引き移った祝儀として、松本本人へは銀二六匁三分相当の、家来衆五名には銀七匁三分相当の肴一折が贈られている。勘定奉行だけでなく、普段実際につきあいのある家来衆にまで祝儀を贈っているところに、三井家の気配りを見ることができる。

(5) 病氣・死亡見舞い

天明元年上半期では、まず、御金方役人星野八三郎へは、「痛風見舞」として銀三匁九分相当の肴一折が、根岸吉五郎という役人へは「病氣見舞」として、銀七匁五分相当の干菓子一器が贈られている。また、五月には若林磐太郎へ、やはり「病氣見舞」として銀六匁相当の干菓子一器と、銀四匁九分相当の肴一折が贈られている。さらに里見幸右衛門へは、妻の病氣見舞いとして銀三匁九分相当の肴一折が、江坂孫三郎という役人へは、安産の祝いとして銀九匁七分相当の肴一折が贈られている。ところが、このとき誕生した子供は半月足らずで死亡したため、死亡見舞いとして江坂へは銀七匁五分相当の干菓子一器が贈られた。

一方、同年下半期の場合、永田源助へは病氣見舞い、伊佐友次郎へは娘の病氣見舞い、若林家家来金子七右衛門へも病氣見舞いとして、それぞれ銀三匁九分相当の肴一折を贈っている。しかし伊佐の

娘はその五、六日後に亡くなり、銀五匁六分相当の乾物五種が贈られ、金子自身も約ひと月後に死亡したため、香典として金一分に相当する金百疋が贈られた。また、土山宗次郎へは病氣見舞いとして銀七匁五分相当の肴一折が、江坂孫三郎と中野藤十郎は妻の病氣見舞いとして、銀四匁九分相当の肴一折ずつが贈られている。なお、若林磐太郎は療養が長引いており、九月にも病氣見舞いとして銀五匁相当の干菓子一器が贈られた<sup>16</sup>。

このように、病氣見舞いに関しては、贈答相手により銀七匁五分のグループと、銀三匁九分のグループとに分けられていたようである。そして、妻などの病氣見舞いの際には、銀三匁九分、あるいは銀四匁九分が相場だったといえそうである。

(6) 「家」への見舞い

天明元年上半期の「目録」にはまず、婚礼祝儀として金一分相当の金百疋が、隠居の場合は金二分相当の金二百疋が、家督相続の場合には銀六匁相当の干菓子一器の贈答事例が記録されている。婚礼については、同二年上半期には金二百疋が贈られている例もあり、<sup>17</sup>「家」に対する贈答は、多くとも金一、二分程度までが相場であったといえよう。



(7) 着任など祝儀

天明元年上半期では、伊佐新左衛門が御金方の元締役を退任した際には金二分相当の金百疋が、そしてその後任に就任した伊佐友次郎へは同額の贈答が行われている。一方、同二年一月に勘定奉行松本伊豆守が田安家家老に転任となったおりには、その祝儀として銀三六匁一分相当の鯛一折りが、その後任として新たに勘定奉行に任ぜられた赤井忠晶へは、銀三七匁二分相当の鯛一折りが祝儀として贈られている。<sup>(18)</sup> 天明二年一月の銀相場は、金一両〓銀六〇匁一分五厘〓三分五厘であったため、<sup>(19)</sup> 御金方であろうと、勘定奉行であろうと、祝儀の金額ほぼ同等であったことがわかる。

(8) 留守居見舞い

天明元年上半期に留守居見舞いが贈られているのは、永田源蔵・中野藤十郎・富見源三郎・里見幸右衛門・若林磐太郎の五名で、一件のうち六件が若林磐太郎に対するものであった。贈答品はすべて肴一折りで、相当金額はほぼ銀三〓四匁程度である。なお、四月に若林磐太郎へ銀八匁七分の肴一折りが贈られているが、この金額は異例なことである。若林家については後述する。

(9) 餞別など

上京餞別・帰京餞別などと称して、若林市左衛門へは金七両二分相当の金三千疋と、銀一三匁五分

相当の柚餅一箱が贈られているのが、天明元年上半年における最高額である。金一両一分相当の金二百疋と銀一三匁五分の贈られている里見幸右衛門、金百疋に銀二匁相当の苧麻二把ずつ贈られている広瀬文治・沢田又三郎とは格段の差が生じている。同二年・三年上半期においても、賤別として贈られているのは金百疋に苧麻二把が相場であることから、やはり若林が格別の待遇を受けていたことがわかる。

(10) 挨拶

「挨拶之儀有之」「世話頼み挨拶」などと表現されているのが、この項目である。つまり、仕事上の便宜を図ってもらったお礼であろう。天明元年上半年の場合、たいていが肴一折、鰯節一折が贈られており、金額も銀三匁から一二匁程度で、他の年でも同様の傾向が指摘できる。ただし、ここでも後述する若林市左衛門への贈答のみは例外である。

二、ねだりの実態

天明元年上半年における、「ねだり」関連の事例は六件である。この中から、御金方同心衆らが三井家を訪問した際に飲食を振る舞う「入来入目」を除くと、いわゆる「ねだり」行為は三件である。

表2 「ねだり」の集計（出典は表1に同じ）

No	年次	件数	金	銀	合計	金換算
1	天明元年	3	1分	102匁3分	銀 116匁9分5厘	金 2両
2	天明2年	2	0	74匁3分	銀 74匁3分	金 1両1分
3	天明3年	11	2両	2貫617匁7分	銀2貫738匁3分	金 45両1分3朱
4	天明4年	11	4両1分	1貫720匁3分	銀1貫971匁4分7厘5毛	金 33両1分2朱
5	天明5年	5	0	923匁1分	銀 923匁1分	金 16両1分2朱
6	天明6年	2	0	218匁7分	銀 218匁7分	金 3両3分3朱
7	天明7年	5	0	606匁5分	銀 606匁5分	金 10両2分3朱
8	天明8年	8	0	1貫185匁9分	銀1貫185匁9分	金 21両1分1朱
	合計	47	6両2分	7貫448匁8分	銀7貫835匁2分2厘5毛	金134両1分2朱

（注：天明6年は下半期データなし）

御金方同心衆へ銀七匁四分相当の弁当を贈ったり、藤沢弥三郎からの依頼を受け、当時書家として著名であった深川の三井親和へ認め物を頼み、その謝礼金百疋（金一分）も負担させられている。さらに、宮川源次郎の家内の者の芝居見物料をも負担しているのである。しかし、実はこの年の「ねだり」は、むしろ少なかったといえる。

なお、時代は下るが寛政六年（一七九四）正月二〇日に、川上勝蔵・伊藤佐七両名に対する「入来入目」の内訳は、酒代銀六匁二分、肴代一二匁一分、青物代銀六分、薪醬油炭等代銀八分の計銀一九匁七分であった。<sup>(21)</sup>他の日には、「米代」が計上されている場合もある。

さて、こうした「入来入目」を除き、「ねだり」行為と判断できる事例数とその費用を、天明元年から八年にわたる「目録」に基づき集計したものを表2に、天明三年および四年の具体例を表3に示した。

表2に示したとおり、すべての事例は四七件認められたが、

表 3 天明3・4年の具体例 (出典は表1に同じ)

No.	年	月	日	人 名	摘 要	品 物	金 額
1	天明3年	5	24	町田三大夫	ねだりにつき ねだりにつつき ねだりにつつき ねだりにつつき ねだりにつつき ねだりにつつき ねだりにつつき ねだりにつつき ねだりにつつき ねだりにつつき ねだりにつつき ねだりにつつき	家内芝居入目	銀176匁1分
2		5	6	河野庄右衛門		家内へ振る舞い	銀457匁5分
3		5	23	勘定奉行赤井越前守若殿・御方様		振る舞い入目	銀721匁5分
4		7	4	御金方同心衆		振る舞い入目	銀225匁5分
5		7	9	河野庄右衛門・ほか近習衆		振る舞い入目	銀305匁8分
6		7	28	若林市左衛門御家内		芝居振る舞い入目	銀212匁1分
7		8	1	河野庄右衛門		振る舞い入目	銀288匁3分
8		10	3	愛知長左衛門		肴物一重	銀 14匁4分
9		11	21	勘定奉行赤井越前守御部屋様		羊羹三竿	銀 8匁6分
10		12	16	勘定奉行赤井越前守		浄瑠璃大夫・三味線御召し見 遊、挨拶金二枚	金2両
11		12	16	愛知長左衛門、ほか同道者あり		振る舞い入目	銀208匁9分
12	天明4年	1	5	勘定奉行赤井越前守方御殿様	ねだりにつつき ねだりにつつき ねだりにつつき ねだりにつつき ねだりにつつき ねだりにつつき ねだりにつつき ねだりにつつき ねだりにつつき ねだりにつつき	人形御手遊び煙草入れ等	銀 66匁5分
13		3	1	勘定奉行赤井越前守		煙草入れ	銀 25匁
14		3	19	若林市左衛門・御部屋様・御女様		芝居振る舞い入目	銀229匁5分
15		5	21	町田三大夫		家内芝居振る舞い入目	銀135匁1分
16		6	28	河野庄右衛門		振る舞い入目	銀355匁
17				河野庄右衛門・愛知長左衛門		振る舞い入目	銀53匁3分
18		9	25	御金方同心衆		振る舞い入目	金4両1分
19		12	22	勘定奉行赤井越前守		八丈切鐘仕立て代	銀 13匁
20				愛知長左衛門		銀の石筆2本	銀 29匁
21				近藤浅右衛門		振る舞い入目	銀114匁4分
22				宮川源次郎	ねだりにつつき	家内芝居振る舞い入目	銀211匁8分

これまで二、三件であった「ねだり」行為が、天明三年以降五、一件と、明らかに増加していることがわかる。このことは恐らく、天明二年一月二五日に赤井忠晶が勘定奉行に就任したことで無関係ではあるまい。赤井自身およびその家族に対する接待も、頻繁に行われていたことが表3から明らかで、赤井自身は浄瑠璃大夫・三味線弾きを招いての遊興費や煙草入をねだっている。しかし、この二年以外の年でも、赤井の妻子らが芝居見物や物品・飲食をしばねだっており、本人より妻子への接待の方が多く見られる点、興味深い。つまり、奉行のこうした待遇を目の当たりにした役人達も、「ねだり」行為を違和感なく行うようになったと考えられるのである。しかし、「目録」にはしばしば「無拠」と記されており、三井家にとつては甚だ迷惑な行為であったことがわかる。

さて表2に示したデータの内容は、全体の約四〇％にあたる一九件が「ねだり<sub>ニ</sub>付振舞入目」という費目で占められている。これは飲食を振る舞ったと考えられるが、一回の支出は、天明七年七月の元締衆に対し行きがかり上振る舞ったという銀九三匁から、天明三年五月に振る舞われた七二一匁五分までと開きが大きい。なお、この最高額はやはり赤井妻子に対する接待であった。そして次に多いのは、一件の「芝居振舞入目」である。これは全体の二三％を占めている。その支出は、天明八年一月「ねだり<sub>ニ</sub>付無拠」里見武右衛門の家に芝居を振る舞った銀八三匁三分から、天明五年六月に振る舞われた銀六九一匁までと、これもまた開きが大きい。もちろん、この最高額もまた赤井の妻子に対するものである。この中には恐らく、見物料だけでなく芝居茶屋での飲食代も含まれていたと

考えられる。いずれにせよ、当時の芝居見物が接待の材料として非常に有効な手段であったことが確認できよう。

これらの他にも、土佐の銘酒・土佐鶴、羊羹、鰻、蒲鉾などの食品、人形、手遊び細工物、煙草入れ、筆などもみられる。勘定奉行を筆頭に、為替方役人らのねだりの実態は、かなり度を越えた露骨なものであったことがわかる。

### 三、役人との癒着

三井家による為替方役人に対する贈答の中でも、特に目立っているのが若林市左衛門への贈答である。市左衛門は当時、御勝手組頭を勤めていたことが江戸両替店で作成した「御用日記」から確認できる。<sup>(22)</sup>さらに天明三年四月五日、兼務として長崎御用掛に就任、同五年九月二八日に御普請御用掛へ転出していることも、「目録」に記されている。なお、先述の磐太郎は市左衛門の長男である。さて、表4は、天明期における市左衛門への贈答事例を、「目録」に基づき集成したものである。

市左衛門へは、この八年間で一二七件、金額にして金一〇七両以上もの金品が、三井家から贈られている。顕著な傾向として指摘できることは、市左衛門が長崎御用掛在任中の約二年半の間に高額な贈答が行われている点である。在任中に贈られたのは四一件、金額にしておよそ金四八両二分にのぼ

表 4 若林市左右衛門への贈答（出典は表 1 に同じ）

年 次	件数	%	金	銀	合 計	金 換 算
天明元年	9	7.1	7両2分	160匁2分	銀 599匁7分	金 10両0分3朱
天明 2 年	15	11.8	2分	204匁3分	銀 234匁0分	金 3両3分3朱
天明 3 年	15	11.8	7両2分	547匁5分1厘	銀 998匁7分6厘	金 16両2分1朱
天明 4 年	23	18.1	22両2分	516匁9分	銀 1846匁6分5厘	金 31両0分3朱
天明 5 年	9	7.1	2分	195匁8分	銀 224匁1分5厘	金 3両3分3朱
天明 6 年	10	7.9	3分	129匁3分5厘	銀 170匁7分5厘	金 3両0分1朱
天明 7 年	23	18.1	10両2分	876匁7分	銀 1474匁1分5厘	金 25両3分2朱
天明 8 年	23	18.1	3両1分	516匁8分	銀 697匁8分2厘5毛	金 12両2分
合 計	127	100	53両	3貫147匁5分6厘	銀6貫245匁9分8厘5毛	金107両1分

（注：天明 6 年は下半期データなし）

り、これは八年間の総計の四五・二％に相当しているのである。とりわけ、臨時御用の礼金として金五両、お世話に対する挨拶に金五両、お世話と頼みごとに対する挨拶に金一〇両、臨時為替銀増し渡しに対する挨拶として金七両二分などの費目が際だっている。つまり、これらはすべて、仕事上の便宜を図ってもらったことへの謝礼金である。

三井家において、長崎直入札を担当していたのは越後屋長崎方という部署で、<sup>(23)</sup>創始期の同家にとって、長崎貿易の輸入品である「唐反物」は、呉服店経営において主要な取扱商品のひとつであった、との指摘もある。<sup>(24)</sup>長崎方の問屋売り高は、明和後期（天明前期（一七六八～八三）ごろには、宝暦期前半（一七五一～五六）に比べて著しく減少するが、<sup>(25)</sup>荒物方取引高が急増した天明後期（一七八四～八八）より増加に転じている。<sup>(26)</sup>そして寛政四年（一七九二）、荒物の落札・取引を担当する「荒物方」が、長崎方に開設されるのである。<sup>(27)</sup>荒物方が扱う「唐荒物類」は、白砂糖、氷砂糖、錫、鉛、水銀、象牙、胡椒、など

で、ほかに鼈甲、鮫、水牛角、白檀、紫檀、黒檀などの小間物類も扱っていたとい<sup>(28)</sup>う。

以上のような三井側の事情を考慮すると、天明期に同家より為替方へ何らかの働きかけが行われていたと考えるのも矛盾はない。しかも、同家が贈答によく使っていた砂糖は、寛政一〜一二年（一七九九〜一八〇〇）には長崎方の問屋売り上げ中で圧倒的に多額の売り高を示している。<sup>(29)</sup>砂糖は相場の変動が激しく、多額の損失の生じることがあったとはい<sup>(30)</sup>え、同家が砂糖ビジネスに意欲を示していたことを、為替方の役人らへの暑中見舞いの定番品として贈ることで、さりげなくアピールし続けていたと解釈するのは、考えすぎであろうか。折しも、重商主義的な経済政策を推し進めていた老中田沼意次が、長崎貿易の拡大化を図っていた時期である。<sup>(31)</sup>若林市左衛門との親密な関係はその後、寛政期以降も続けられるものの、砂糖ビジネス拡大に向けた準備段階として、この時期長崎御用掛を勤めていた若林市左衛門への贈答が、同家にとって重要であったことがうかがえるのである。

もう一点目立つのは、天明七年・八年の二年間の動向である。兩年ともに贈答は二三件ずつ行われており、支出もおよそ金三八両三分にのぼる。七年では六月に娘に振舞入目として約金四両二分、一月には芝居をねだった妻へ約金四両が支出されており、やはり妻子への接待も頻繁に行われている。本人へは「御頼筋首尾能相済、御礼」として金一〇両が、一月に贈られている。八年では、若林が京都に行った餞別と帰府祝いに計金三両強が贈られたほか、娘にねだられ芝居を振る舞った金約二両三分が支出されている。田沼が完全に失脚し、松平定信が老中に就任したのが天明七年六月のこ



表 5-a 土山宗次郎への贈答金額（出典は表 1 に同じ）

年 次	件数	%	金	銀	合 計	金 換 算
天明元年	4	6.5		102匁1分	銀 102匁1分	金 1両3分
天明 2 年	14	22.6		913匁2分	銀 913匁2分	金15両1分2朱
天明 3 年	11	17.7	1両1分	770匁7分5厘	銀 846匁1分2厘5毛	金14両
天明 4 年	12	19.3	2分	360匁8分2厘5毛	銀 390匁3分7厘5毛	金 6両2分2朱
天明 5 年	14	22.6	2分	380匁5分	銀 408匁1分	金 7両1分2朱
天明 6 年	4	6.5		51匁5分5厘	銀 51匁5分5厘	金 1分2朱
天明 7 年	3	4.8		106匁8分	銀 106匁8分	金 1両3分2朱
合 計	62	100	2両1分	2貫685匁7分2厘5毛	銀2貫818匁2分5厘	金48両1分2朱

（注：天明 6 年は下半期データなし）

表 5-b

土山宗次郎への贈答内訳  
（出典は表 1 に同じ）

No.	事 項	件数
1	時候見舞い	24
2	入来・招待	21
3	病氣・快気	6
4	ねだり	5
5	祝儀	3
6	良夜	2
7	近火見舞い	1
	合 計	62

「越後買米事件」に関連し死罪となつて<sup>(33)</sup>いる。  
さて、土山へは七年間に六二件、額にして金四八両あまりが支出されている。天明二年に金

年閏一〇月に富士見蔵番頭に移動になり、七年一二月、いわゆる組頭を務めていた土山宗次郎との比較で明白である。表 5 に、土山に対して三井家の行った贈答を集計した。なお土山は、天明六

たとも、解釈できまいか。  
こうした若林への贈答が異例であつたことは、吟味および下御  
である若林との関係をさらに深めるべく、贈答をより頻繁に行つ  
したら、既得權益を守り、業務を有利に進めるため、御勝手組頭  
（一七九二）からオランダおよび中国との貿易を大幅に縮小して  
いる。<sup>(32)</sup> もし三井家で、この政策転換に何らかの危機感を抱いたと  
定信は「長崎は日本の病のひとつ」と見なしており、寛政三年  
とである。

表6 天明4年上半期上位者（出典は表1に同じ）

No.	人 名	役 職	回数	備 考
1	赤井越前守	勘定奉行	22	「若殿」含む
2	河野庄右衛門	赤井家中	15	
3	若林市左衛門	御勝手組頭	12	
4	里見幸右衛門		10	
5	中野藤十郎	吟味	8	
6	土山宗次郎	吟味	6	
7	松本伊豆守	勘定奉行	5	
8	時田三太夫	松本家中	5	
9	河野茂平次	赤井家中	5	
10	藤本甚助	御勝手組頭	5	

一五両強、三年に金一四両と、この二年間で全体の六〇%を占めている。贈答の内容としては、暑氣見舞い・寒氣見舞いとして定番の砂糖・鶏卵などが贈られた事例が最も多く二四件で、入来や招待などが二一件とこれについている。しかし「度々入来入目」との記載がしばしばみられることから、実際はこれらもつとも多かったと考えられる。ついで病氣見舞い・快氣見舞いとして菓子や肴、鯛などが贈られている事例が六件、土山の好物だったと思われる鰻重などをねだられた事例が五件、御用掛就任祝儀などが三件、鯖寿司など良夜の祝儀が二件、そして近火見舞いとして菓子が一件贈られている。金額としては、就任祝いと快氣祝いにそれぞれ金二分ずつ贈られているのが目立つ程度で、もっぱら「入来入目」つまり飲食費として支出されていたことがわかる。

土山は、勘定奉行所内では数名いる吟味・下御組頭のひとりであったとはいえ、蝦夷通として知られた人物である。そのため田沼のブレーンのひとりとして活躍してはいたものの、三井

家が蝦夷に興味を示していた形跡はない。したがって頼みごとをすることも、世話になることもなかったと思われ、もっぱら土山が一方的に要求していたことがわかる。両者を比較した場合、若林の贈答件数、金額ともに土山の二倍となっているのである。

さらに、天明四年上半期の「目録」に掲載された贈答先の氏名と件数上位一〇件を表6にまとめた。ここからも明らかのように、勘定奉行の赤井忠晶への贈答が二二件で最も多い。しかし、同じ勘定奉行でも松本秀持への贈答はわずか五件である。二二件の内、赤井が三井家にねだったのが二件なので、その分を差し引いたとしても、両者間の待遇の差は明らかである。これはおそらく、三井家にとっては松本より赤井の方が有益だったということであろう。赤井について多いのが赤井家中の河野庄右衛門で、一五件にのぼる。河野は赤井への窓口であったと考えられ、やはりこの内二件は赤井同様、「ねだり」付振廻入目」という費目となっている。

次に多いのが、若林市左衛門の一二件である。しかし、若林と同役である藤本甚助への贈答はわずか五件である。この差は、若林は藤井と異なり、御勝手組頭の在任期間が長いことに起因すると考えられる。このように三井家では、同じ役職であってもおそらくは同家との利害関係により、各人ごとに異なった対応をしていたことがわかる。

## 四、三井家における贈答の意味——むすびにかえて——

以上、三井越後屋における贈答慣例について見てきた。為替方役人らへの贈答は、三井家にとって重要と思われる人物に対しては、季節に合わせ、または人生の節目節目に積極的に行われていたが、多くの役人達からはしばしばねだられており、しぶしぶ出費していたことも明らかとなった。しかし、三井家にとっては非合法な行為としての認識は少なく、あくまでも経営を円滑に押し進めていくためのひとつの手段であり、当然あるべき商業活動の一環としてとらえていたことがわかる。

本稿で為替方役人への贈答関係を分析した天明期は、いわゆる田沼時代の後期にあたり、松本・赤井二名の勘定奉行は、実際の実績は乏しいものの、田沼のブレーンとして有名である。この時期は経済政策の転換期であり、その中でワイロの横行していたことも事実である。しかし、それはこの時期特有のものであったのだろうか。

三井家では、安永期を境に勘定関係の帳簿体系を変更したようで、「地代店賃勘定目録」や大坂両替店作成の「御為替方入目目録」など、安永期から作成が開始されている。同様に本稿で分析している「目録」も天明以前は、安永四年下半期、安永九年上半期および下半期の三点しか現存しない。そこで、図1に安永四年（一七七五）から寛政六年（一七九四）にわたる二八冊の「目録」への記載件数、および為替方関係の支出総額を示した。なお、支出の中には三井家の名代の役料や、將軍への正

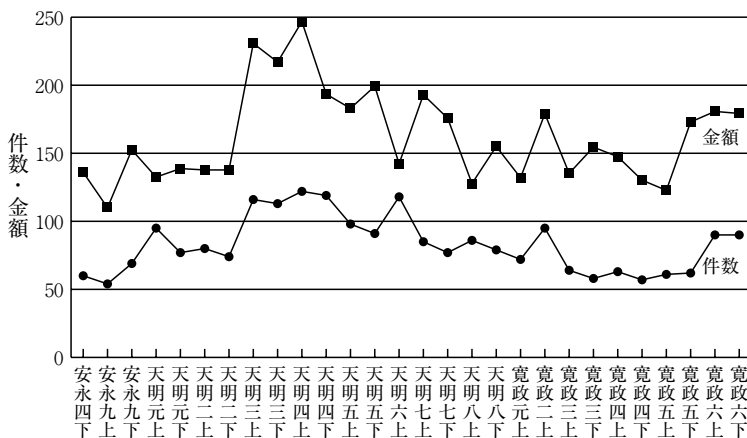


図1 掲載件数および総額（出典は表1に同じ）

月や八朔の贈答に関わる費用も含まれているため、総額のすべてが奉行および役人に対する贈答費用ではない。

さて、図に示したように、天明三年と四年、六年上半期の件数が一〇〇件を越え、突出していることがわかる。そして五年も上半期が九八件、下半期が九一件と、同様に高水準を保っている。その後件数は減少するが、寛政六年に再び増加する。一方金額も、件数とほぼ同様の傾向を示していることがわかる。

ところで、天明六年下半期の「目録」が、三井文庫には現存していない。もっとも、寛政元年および二年下半期の「目録」も現存していないため、単なる偶然と考えることもできよう。しかし、天明六年下半期は、田沼が隠居を命じられ、松本・赤井・土山が左遷となった時期である。しかも、同七年上半期以降、「目録」から勘定奉行に対する贈答の記録が記載され

ない書式に変更されているのも、気になるところである。

天明六年（一七八六）八月、田沼が老中を解任され、それから一〇か月あまりを経た翌七年六月に松平定信が新たに老中に就任するが、田沼政権が終わったからといって、役人への贈答がなくなったわけではない。寛政四年上半期の「目録」には、詳細は不明であるが「大印御先渡一件」と称される事案がすんだ謝礼として、三井家から若林市左衛門へ金七両二分が贈られている。<sup>(34)</sup>いくら政権が交代しても、商人と役人を取り巻く環境はまったく変わることがなかったのである。

本稿で、三井家による役人らへの贈答の実態が明らかとなったが、これは決して三井家のみの特殊な事例ではない。今後は、三井家と同業他家および顧客とのつきあいや、また、天明期以外の為替方役人への贈答の実態などを明らかにし、贈答という慣例が日本文化の中で展開されるビジネスにいかの影響を与えていたのか、さらに深く検討していきたい。

# 註

- (1) 安岡重明『三井財閥史―近世・明治編』（教育社、一九七九年）、二五五―二五六頁。
- (2) (財)日本経営史研究所編『三井両替店』（株三井銀行、一九八三年）、一九三頁。
- (3) 辻善之助『田沼時代』岩波書店、一九八〇年（初版は一九二五年）。
- (4) 大石慎三郎『田沼意次の時代』岩波書店、一九九一年。
- (5) 竹内誠『江戸と大坂』小学館、一九九三年。

- (6) 藤田覚『松平定信』中央公論社、一九九三年。同『田沼意次』ミネルヴァ書房、二〇〇七年。
- (7) 三井文庫蔵「天明元丑年正月朔日と七月十四日迄為替方御勤方入目目録 江戸両替店」(続五九四八―一)。
- (8) 三井文庫蔵「天明五巳年正月朔日と七月十四日迄為替方御勤入目目録 江戸両替店」(続五九五八―一)。
- (9) 三井文庫蔵「天明元丑年七月十五日と十二月廿九日迄為替方御勤入目目録 江戸両替店」(続五九四九―一)。
- (10) 三井文庫蔵「天明四辰年七月十五日と十二月晦日迄為替方御勤入目目録 江戸両替店」(続五九五七―一)。
- (11) 三井文庫蔵「天明五巳年七月十五日と十二月晦日迄為替方御勤入目目録 江戸両替店」(続五九五九―一)。
- (12) 前同史料(9)。
- (13) 吉原健一郎「江戸災害年表」(西山松之助編『江戸町人の研究 第五卷』吉川弘文館、一九七八年、四九六―四九七頁。
- (14) 前同史料(7)。以下、特に註のない場合は同史料からの引用である。
- (15) 前同史料(9)。
- (16) 前同史料(9)。
- (17) 三井文庫蔵「天明式寅年正月朔日と七月十四日迄為替方御勤入目目録 江戸両替店」(続五九五〇―三三)。
- (18) 三井文庫蔵「天明式寅年七月十五日と十二月晦日迄為替方御勤入目目録 江戸両替店」(続五九五一―三三)。
- (19) 三井高維編『新稿両替年代記関鍵卷二考証篇』(岩波書店、一九三三年、二九七頁。
- (20) 前同史料(17)、および三井文庫蔵「天明三卯年正月朔日と七月十四日迄為替方御勤入目目録 江戸両替

店」(統五九五二―)。

- (21) 三井文庫蔵「寛政六寅年正月朔日〆七月十四日迄為替方御勤入目目録 江戸両替店」(統五九七四―)。
- (22) 三井文庫蔵「天明二年壬寅正月吉日 御用日記」(本三三二) ほか。
- (23) 賀川隆行『近世三井経営史の研究』(吉川弘文館、一九八五年)、四六四頁。
- (24) 前同書(23)、四六二頁。
- (25) 前同書(23)、四七六頁。
- (26) 前同書(23)、四八二頁。
- (27) 前同書(23)、四八〇頁。
- (28) 前同書(23)、四八一頁。
- (29) 前同書(23)、四八四頁。
- (30) 前同書(23)、四八六頁。
- (31) 前同書(5)、四二五頁。
- (32) 前同書(6)、『松平定信』一八三頁。
- (33) 前同書(4)、一五一頁。
- (34) 三井文庫蔵「寛政四子年正月朔日〆七月十四日迄為替方御勤方入目目録 江戸両替店」(統五九七〇―)。